

認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解
を深めるための普及啓発に関する調査研究事業

「認知症にやさしい地域づくり」 評価指標の作成

国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター
准教授・主任研究員
庄司昌彦 (Masahiko Shoji)

概要・体制

認知症にやさしい地域づくり評価指標（フィデリティスケール／フィデリティ尺度）を設計する。指標は、理論的・外部評価的に与えるものではなく、各地の先進的な実践の優れた点を取り入れ、さまざまな組織や自治体が自主的に判断し、各地域にあった取組みを構築していくことを容易にすることを旨とする。

ワーキンググループ

岡田 誠 （株）富士通研究所R&D戦略本部シニアマネージャー

徳田雄人 （株）スマートエイジング代表取締役

河野禎久 筑波大学ダイバーシティ推進室助教

協力：認知症フレンドリージャパンイニシアチブ

事務局

庄司昌彦 国際大学GLOCOM 准教授／主任研究員

調査手順・対象・時期

1. 「認知症フレンドリージャパンサミット」で意見収集（9月）

- 評価指標（a版）の大枠を提示し、指標の構成要素等に関する意見抽出や、全国の事例収集等を行う
- 行政関係者、福祉関係団体、民間企業等

2. 細目に関する仮説の設定（9月）

- 認知症当事者の意見、国際動向等を踏まえ、WG（3名+事務局）で各項目・レベル等の仮説設定を行う

3. 先進地域ヒアリング調査の実施（富士宮・大牟田）（10-12月）

- 仮説検証・評価を行うため、先進地域で認知症の当事者・支援者等を含むインタビュー調査等の情報収集を行う

4. 評価指標（a版）に関する対話型WSの実施（1-2月）

- 3を踏まえた評価指標（a版）を紹介し改訂に向けた課題を抽出
- 行政関係者、福祉関係団体、民間企業等

本日の報告

0. 前回報告の概要
1. 先進地域ヒアリング調査
2. 評価指標に関する対話型WS
3. ここまでの結果を踏まえたWG考察
4. 2月27日フォーラムに向けて

前回報告の概要

- 指標作成プロセスの2つの方向性
 1. モデル地域に基づく開発・検証的プロセス
 - 富士宮・大牟田のインタビューデータを活用したWG作業
 2. ワークショップに基づく普及・啓発的プロセス
 - DFJIサミットでの一般参加者向けワークショップ
- 普及・啓発的プロセス
 - 自分たちの取組みを指標化することで、何を目指しているのか、何を行えばいいのかが明確になった人もいた
 - 指標化に多くの人を巻き込むことで、ネットワーク拡大を促せる
 - 各地域の個人・団体・事業者の取組みや目標の可視化・共有化は、それぞれの意識の深化や相互理解を進め、次のアクションへの手がかりとなるのではないか

前回報告の概要

- 指標の項目には2つの要素がある
 1. 先進各地（富士宮・大牟田）で特徴的な要素
 2. （他地域でも）共通に取組まれている要素
 - 1. は、先進的取組みの特徴への理解を進める啓発効果がある
 - 2. の全要素は現段階では把握できていない
 - 今回の調査では1. を作る中から2. を見出している

仮説検証・評価を行うため、先進地域で認知症の当事者・支援者等を含むインタビュー調査等の情報収集を行う

先進地域ヒアリング調査

目的・概要

- これまでに作成した「認知症の人にやさしい地域」に関する評価指標の妥当性を検証する。
- モデルケースとした2つの先進地域（静岡県富士宮市、福岡県大牟田市）の取組みに中心的に携わるキーパーソンに面接調査を行う。

回	日時	対象者
第1回	2015年12月02日（水） 18:00-21:00	富士宮市関係者 1名
第2回	2015年12月23日（水） 18:00-21:00	大牟田市関係者 1名
第3回	2016年01月09日（土） 14:30-17:30	大牟田市関係者 3名

調査内容 1. 指標の目的・手続き

1. 指標作成の目的の確認
2. カテゴリー作成の手続きの確認
3. 特長的なカテゴリー抽出の手続きの確認
4. カテゴリー一覧の確認
 - 実際の取り組みをどの程度反映しているか？
（抽出したカテゴリーの妥当性（納得感））
 - その地域らしさが表れているか？第三者視点と一致するか？
（スケール化したカテゴリーの妥当性（納得感））
5. カテゴリー毎の軸（小分類）の設定方法の確認
6. 軸（小分類）毎のレベルの設定方法の確認

調査結果 1. 指標の目的・手続き

富士宮・大牟田の両関係者から基本的に同意を得た。
また特に、下記のようなコメントを得た。

1. 目的の確認

- 「これまでやり方がわからず自分達の取組みを評価できなかった」
- 「自分たちの取組みを振り返るきっかけになる」
- 「他地区での取組みについて改善点を助言しやすくなる」
- 「客観的な視点から押し付けでなくいえるようになる」

4. カテゴリー一覧の確認

「外部の視点が新しい気づきをもたらした」という意見。
逆に、被調査者の職務の範囲にある取組みの中にはインタビューで特に語られず、今回の指標化では拾えていないポイントもあることも明らかになった。→フィードバックを受け項目追加。
※外部視点を入れコミュニケーションする中から暗黙知が形式知化する

調査内容 2. 内容・評価方法

1. 軸（小分類）設定の妥当性の確認

- ① 取り組みや工夫の「視点」と一致するか？
- ② 不足している軸はないか？（不足から対話がうまれるか？）
- ③ 軸（小分類）項目から新しい発見はあるか？

2. レベル設定の妥当性の確認

- ① 右端は「認知症にやさしい」状態だと思えるか？
- ② 各軸のレベルは実際に評価可能か？
- ③ 各軸のレベルの間隔は妥当か？
- ④ ベル項目から新しい発見があるか？

3. 評価者の確認

- ① どのような人であれば評価が可能か？
- ② どうすれば広く展開できるか？どんな工夫が必要か？

調査結果 2. 内容・評価方法

1. 軸（小分類）設定の妥当性の確認

① 取り組みや工夫の「視点」と一致するか？

⇒各取り組みの重要な点と一致すると同意が得られた

② 不足している軸はないか？（不足から対話がうまれるか？）

⇒大牟田では、「SOS模擬訓練」について関係者ととともに軸を新たに追加した。また、カテゴリー毎に軸を構造化（類型化）すると、より理解・評価がしやすいのではないかと指摘を受けた

③ 軸（小分類）項目から新しい発見はあるか？

⇒「今後気を付けるべき点に気づけた」「自分たちの取り組みがまだまだだなと感じた」等、新しい発見を得られたことが示された。

調査結果 2. 内容・評価方法

2. レベル設定の妥当性の確認

① 右端は「認知症にやさしい」状態だと思えるか？

⇒「現実的にすぐには難しいが目指す状態として設定する価値はある」等、概ね同意が得られた。

②各軸のレベルは実際に評価可能か？

⇒「求める厳密性にもよるが、自分たちの地域での取り組みに基づけばイメージは十分に可能である」と、概ね同意が得られた。

③ 各軸のレベルの間隔は妥当か？

⇒一部項目（特に数字で表現されている項目）は、レベル設定の意図について十分な説明の記述が必要

④ レベル項目から新しい発見があるか？

⇒「取り組みの段階が具体的に示され面白い気づきが得られた」「まだまだ取り組みが甘いことに気づかされた」等、レベルの項目から新しい発見があることが示された

調査結果 2. 内容・評価方法

3. 評価者の確認

① どのような人であれば評価が可能か？

⇒「少なくとも行政職員は十分にイメージができ、評価可能」。
ただし、本指標のコミュニケーションツールとしての活用の前提が示されている必要がある。

② どうすれば広く展開できるか？どんな工夫が必要か？

⇒関係者間や住民との対話のツールとして期待。
指標の作成や評価を通して、様々な立場の人が自分事として認知症を捉え直し目標を共有する、等の声も聞かれた。

まとめ

- 「認知症の人にやさしい地域」に関する評価指標は、現場で携わってきたキーパーソンに好印象であり、妥当性は概ね確認された。
- 自己評価やコミュニケーションツールとしての価値や可能性については高い評価が得られた。
- 項目は現場の取組みが十分に反映されており、取組みの再確認や新しい気づきへとつながる内容であった。
- 不足している項目や、インタビュー時にはひろわれていない活動があることも示された。
- 前提条件等についての説明や、項目をある程度類型化・構造化して提示することの必要性も示された。
- これらの限界をさらに追究することで、より幅広い事例に適用可能な指標も作成可能であると考えられる。

評価指標（a版）を紹介し改訂に向けた課題を抽出

評価指標に関する対話型WS

概要

- 日時・会場：
 - 1月13日（土）町田市役所（2時間）
- 参加者：
 - 行政関係者3名、認知症カフェ運営者4名、岡田・徳田・河野
- 背景：
 - 市内に認知症カフェは複数あるが、運営上の課題や行き詰まり感、必要な層へ届いているか等の声がある。
- 方法：
 - 3人（行政・現場・インタビュアー役） ×3組に分かれる
 - 予め作成した認知症カフェについての評価指標5カテゴリ14項目からカテゴリごとに各グループで重要と思う項目を選び、指標を作成し対話
 - （ワーク15分+対話5分） × 4 カテゴリ分実施

結果

- DFJサミット（9月）でのワークショップからの改善
 - 項目を予め作成し、参加者に役割を割り振るお膳立て
 - 異なる立場・背景にある参加者が状況を共有しやすくなり、コミュニケーションが円滑になった。
- 評価
 - 「ワークとして楽しかった」
 - 「取り組みの到達点を明らかにできる気づきがあった」
 - 「実践者が振り返りに活用できるだけでなく、客観的指標を間に置くことで、意思疎通がこれまで難しかった行政と実践の間のコミュニケーションも可能になるのでは」

3. ここまでの結果を踏まえたWG考察

- 評価項目の並べ方あるいは構造化（類型化）の仕方
 - 評価項目には各地域に共通する〈理念・抽象的〉なもの（基礎体力あるいは必修科目）と、先進地域や取組みに関する〈個別・具体的〉なもの（専門能力あるいは選択科目）が存在
 - 指標をコミュニケーションツールとしてみた場合、どの項目から評価するかについては、一律ではなく臨機応変に使う方が有効と考えられる
- 各評価項目の評価可能性
 - イベントへの参加率や参加者数などは、厳密な数字が必要であることは少ない
 - 大まかな全体像を把握すればよいことに留意が必要
- 被調査者から追加された項目
 - ある程度形ができたものを提示すると、被調査者も修正案や要望を出しやすく、同意を得やすい。被調査者も取り組みの課題や、より大きなビジョンに気づく
- 評価方法の今後の展開への示唆
 - 「客観指標を間に置くことで、各関係者がそれぞれの立場の『鎧を脱ぐ』ことができるのではないか」という声。各自が持つストーリーの脱構築も起こる
 - 外部の客観的視線に対し立場をフラットにして相対し議論することから、改めて目標を共有し、自分事としてとらえ直すことが可能になるのではないか

4. 2月27日フォーラムに向けて

- 評価指標の概要と成果を紹介
- 受賞事例「わんわんパトロール隊」（岩手県矢巾町）への評価指標の適用可能性を述べる
 - （1）指標には自己評価とコミュニケーションツールとしての使い方がること、（2）評価項目には各地域に共通する〈理念・抽象的〉なものと、先進地域や取組みに関する〈個別・具体的〉なものが存在することを踏まえ、矢巾町はどのような点を重視するかを事前に聞き取り反映する
 - 当事者の方が参加する町田市の事例にも触れることとする